



TITLE:

「芸術と実行」論争の発端：明治四十一年の長谷川天溪と岩野泡鳴との論争を中心に (小特集 近世・近代文学)

AUTHOR(S):

王, 憶雲

CITATION:

王, 憶雲. 「芸術と実行」論争の発端：明治四十一年の長谷川天溪と岩野泡鳴との論争を中心に (小特集 近世・近代文学). 京都大学國文學論叢 2009, 20: 76-95

ISSUE DATE:

2009-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/137375>

RIGHT:

「芸術と実行」論争の発端

——明治四十一年の長谷川天溪と岩野泡鳴との論争を中心に——

王憶雲

はじめに

「芸術と実行」論争とは何か。この論争は、自然主義が提起した重要な問題として研究されてきた。『国文学 解釈と鑑賞臨時増刊号 文芸用語の基礎知識』（昭和五十一年三月、至文堂）の中に、「実行と芸術」という項目があるので、まず参考としてその意味を引いてみよう。

【原義】自然主義の性格を規定した最大の論争点の一つ。実行と芸術の関係をめぐって、両者を切り離す観照主義と実行即芸術を唱える一派とが争った。

【類語】芸術と実生活。実行と観照

この項目の執筆者山田博氏は、この問題に最初に論及したのは島村抱月の「芸術と実生活の界に横たはる一線」（明治四十一年九月、「早稲田文学」）であるが、田山花袋の

「評論の評論」（明治四十二年一月、「文章世界」）が「真の自然主義の態度」を提出したと解説している。また、抱月や花袋の論点に対して岩野泡鳴が「実行文芸とデカダン論」（明治四十二年四月十一・十八日、「読売新聞」、原題は「デカダン論、外数件」）で反論し、論争に発展して、相馬御風や徳田秋声なども発言を加えた」と述べている。『文芸用語の基礎知識』は昭和六十三年十一月に増補第五版が出版されたが、この項目の解説は初版のままとなっている。

山田氏とほぼ同じ指摘をし、「芸術と実行」問題を考察した研究の嚆矢とも言えるのは、平野謙の「実行と芸術」（昭和二十八年九月、「近代文学」）である。平野謙は山田氏の解説と同じように田山花袋と島村抱月に注目し、議論の絶頂が明治四十二年のなかばであると説いている。しかし、平野謙「実行と芸術」以後、多くの研究が出さ

れ、平野説に訂正を促すものもある。その中でも、「芸術と実行」論争の発端はいつなのか、という問題が特に注目されている。今井泰子氏は、論争の発端の時点について、過去の諸説を二つのグループに分け、その中で最も適切なのは明治四十一年四月から六月とする説であるとしている^{三〇}。今井氏自身は、吉田精一『近代文芸評論史・明治篇』（昭和五十二年二月、至文堂）の指摘を踏まえて、長谷川天溪「自然主義と本能満足主義との別」（明治四十一年四月、「文章世界」）が最も早い論であると主張している。

なお、これ以前に、川副国基氏が「無理想・無解決の態度・観照的態度・芸術と実生活との画一線・自然主義は本能満足主義にあらずとするなど、これらはわが国の自然主義者側の共通した態度であり、天溪が最もはやく打ち出した説も多い」と述べるのは、先の時期の天溪の批評を指していると考えられる^{三一}。比較的新しい研究である日比嘉高氏「〈文芸と人生〉論議と青年層の動向」（平成十四年十月、「日本近代文学」）も天溪の「自然主義と本能満足主義との別」と抱月の「文芸上の自然主義」談話筆記（明治四十一年五月、「教育時論」）とを論争の発端としている^{三二}。つまり、一般には、天溪の「自然主義と本能満足主義との別」が発表された明治四十一年四月が、論争の発端として最も早い時点と考えられているわけである。

本稿は、「芸術と実行」論争の発端時期について改めて検討を加えるものである。まず、明治四十一年四月前後の天溪の「芸術と実行」言説を整理し、その言説が提出された背景を考えたい。次に、最初の論争がどのようなものであったかについて、今までの先行研究では見逃されてきた一面を考察する。そのような考察を通して、この論争の文学史的位付けについて検討を加えたい。なお、短い時期に雑誌や新聞に発表された数々の評論を一覧できるように、重要な評論とその発表日付を記した表を本稿の最後に付しているのので、参照されたい。

一

青野季吉が「現代文学でその時ほど創作と評論が密着していた時代はなかった」（『文学五十年』昭和二十二年十二月、筑摩書房）と述べたように、力強く自然主義運動を推し進めたのは、自然主義の小説作品よりもむしろ評論の方であった。しかし、自然主義は一枚岩であったわけではない。自然主義の主張が、論客によって異なっていたのも事実である。石川啄木「時代閉塞の現状」（生前未発表、明治四十三年八月に執筆推定）は、次のように述べていた。

見よ、花袋氏、藤村氏、天溪氏、抱月氏、泡鳴氏、

白鳥氏、今は忘れられてゐるが風葉氏、青果氏、其他——すべて此等の人は皆斉しく自然主義者なのである。さうして其各々の間には、今日既に其肩書以外には殆ど全く共通した点が見出し難いのである。^五

「芸術と実行」論争において自然主義者の意見が分かれるのもその一例だと言えよう。そして、その争点を見極めることは、自然主義の本質を明かす鍵の一つとなるように思われる。

先に引用したように、川副氏は、「芸術と実行」論争において「天溪が最もはやく打ち出した説も多い」と述べるが、その論拠となっているのは、「自然主義と本能満足主義との別」（明治四十一年四月、「文章世界」）である。本稿もこの論文の内容から検討したい。天溪はここで、当時の新聞や雑誌で自然主義と本能満足主義との二つの言葉が混用されている状況を難じ、「自然主義は、文芸上の問題であつて、本能満足主義とは、人生上の実行問題である」と、明確にその違いを規定している。自然主義の目的は「第三者の地位、即ち傍観者の地位に立つて、人生の現象を描写」することにあり、文学創作において「ただ有りの儘を写すだけで」「是非の言を加へない、ということが、彼の主張する「無解決の態度」である。そして、自然主義のこの「無解決の態度」は、本能を満足させることを以つて

解決とする本能満足主義とは対照的なものであると天溪は説明する。

「自然主義と本能満足主義との別」を発表した半月後、「太陽」誌上に「無解決と解決」（明治四十一年五月）を発表した天溪は、そこで「現実といふ動かすべからざる事実だけは承認しなければならぬ」とし、その上で「此の現実こそ、吾れ等の胸中に、新世界を造るべき発足点である。而して其の発足点からは、二つの途が分れてゐる。一を無解決道と名付くるならば、他は解決道である」と述べる。

そして、この「無解決道」こそ、即ち彼が唱える芸術家の態度である。加えて天溪は、「紛々たる現実世界に対して、何等の理想的判断を下さず、即ち解決を附与することなく、有りの儘を眺むるのが自然主義であつて、此処が芸術の範圍であ」と言う。また、自然主義とは「芸術上の主張」で、「人生に於ける実行上の主義ではない」と、ここでも再び自然主義と本能満足主義との差異を強調している。「無解決と解決」でのこれらの主張は、既に「自然主義と本能満足主義との別」で展開されていたものであるから、この「無解決と解決」とは、「自然主義と本能満足主義との別」を発表した後、翌月に自分が担当した「太陽」の文芸時評の欄において、実例を挙げながら、自らの論点をより詳しく述べようとして書き直したものと見なしてよいだら

う。

また、「自然主義と本能満足主義との別」と「無解決と解決」との間にも、天溪はほぼ同じ内容の文章を発表している。四月二十四日・二十五日の「東京二六新聞」に掲載された「芸術即自然主義」である。

この文章の中で天溪は、「吾人が自然主義を主張するのは、芸術の上であつて、實際上の人生に就いて之れを云々するのでは無い」と述べている。さらに天溪は、「或る解決を与へて現実を写したものは、芸術の範囲外に歩を出したものであると思ふ」と、自然主義だけではなく、芸術全体を無解決の描写という主張の下に厳しく規定している。そこで、天溪の主張においては、「芸術≡自然主義」という等式が成立しているのである。

この時期の天溪の発言を整理してみる。彼は自然主義と本能満足主義との混同による世間からの不当な非難を抑えるため、まず自然主義を芸術上だけの主張であるとし、さらに、行動による解決ではなく無解決の態度を取ることこそ自然主義の思想である、というように、実行の前に二重の柵を設けている。繰り返すが、天溪の自然主義理論では、芸術を創作する過程において作者個人の理想を述べたり現実を解釈を下したりすることは禁止される。そしてそれは、外部の現実をそのまま維持して文学作品に転化する行為を

芸術として成立させるためには、必要な前提である。作家が作品において解決の意志を示すと、現実をそのまま再現しようとする自然主義作品としての可能性は根本から消えてしまふと天溪は考えていた。その点が実は天溪の《現実》に対する認識と深くかかわっていたのである。

二

以上のように、明治四十一年四、五月の時点で、天溪は《無解決》の論理を繰り返して説いていた。そして、自然主義は人生における実行上の主義ではないと、はっきり規定していた。このように本能満足主義との差異を弁明するその最も大きな原因は、同時代状況にある。平野謙などの研究も触れたように、明治四十一年二月、女性の姦通を描いた生田葵山の小説「都会」を掲載した「文藝倶楽部」という雑誌は風俗壊乱という理由で発売禁止に処せられた。

葵山「都会」発禁事件は、当時、「自然主義の公判」という見出しで新聞に報道され（明治四十一年二月二十日、「読売新聞」）、裁判の過程も多くの注目を集めた。中山昭彦氏「小説『都会』裁判の銀河系」（『近代小説の「語り」と「言説』』平成八年六月、有精堂）はこの発禁をモデル問題と捉えて、「文学に関わる道徳問題でありながら、

一方ではモデルを自ら暴露する作家の姿勢やモデルを使つて書くこと自体の可否が問われ、他方では描写ばかりか実行のレベルでも姦通や性犯罪の流行が憂慮されるという形で別個に論じられ²⁶⁾たと指摘している。現実を暴露しようとする自然主義文学の実作、たとえば花袋の「蒲団」や、モデル問題を引き起こした藤村の「水彩画家」や「並木」などによつて²⁷⁾、社会側にはあたかもゴシップ記事に接するような期待が高まつていた。中山氏の言葉借りると、「自然派」肉欲といった世間の評判²⁸⁾が定着しており、自然主義運動が直面した社会からの道徳的非難は並一通りのものではなかつたのである。

しかも、その圧力は、「都会」発禁に見られるような、作品の内容やモデル問題というレベルにおいてだけではなかつた。明治四十一年三月二十二日に、東京の大久保で銭湯帰りの女性が殺害され、手ぬぐいを口に押し込まれた状態で発見された。強姦殺人の容疑者として「出歯の亀吉」こと植木職人の池田亀太郎が逮捕されたが、この事件は発覚した当初より紙誌で報道され、注目を集めた。金子明雄氏「メディアの中の死―「自然主義」と死をめぐる言説」(平成八年七月、「文学」)によれば、この出歯亀事件は、当時「自然主義の高潮」という見出しで報道された煤煙事件(明治四十一年三月二十五日、「東京朝日新聞」)とも

結ばれて、社会には「(自然主義)はするもの、実行するものに他ならない」という理解が広がつたという。森鷗外「キタ・セクスアリス」(明治四十二年七月、「スバル」)は出歯亀事件について言及しており、この事件は「所謂自然主義と聯絡を附けられる。出歯亀主義といふ自然主義の別名が出来る。出歯るといふ動詞が出来て流行する」と述べている²⁹⁾。また、辻潤「ふもれすく」にも「自然主義が出歯亀によつて代表された」というような回想がある³⁰⁾。『日本国語大辞典』(第二版、二〇〇一年九月、小学館)の「でばかめしゆぎ」という項目には、「当時現実暴露を旨としてしばしば性的描写を行つた自然主義に対して揶揄的に使われた語」という意味が挙げられている³¹⁾。

このように、自然主義の指導者としての天溪が、明治四十一年四月から自然主義は芸術上の主張だという弁明めいた言説を執拗に繰り返していたのは、「都会」の裁判、出歯亀事件、あるいは煤煙事件などによつて、自然主義に対する誤解が広まっていたからなのではないかと考えられる。

さて、実際に天溪はどのようにこれらの事件を見ていたのだろうか。事件の中でも、天溪は特に「都会」の裁判に注目している。彼が編集を担当した「太陽」には、時事を報道する欄があり、その中に文芸界のニュースも掲載され

ている。この年の三月号、文芸界の報道の見出しはまさに「発売禁止問題」であり、葵山の『虚栄』と「都会」との両作が発売を命ぜられたことを取り上げている。そしてその中には、「近來一部の評壇には、肉欲文学、春情文学等の文字使用せられ、為に自然主義は即ち淫猥文学なりとの誤解を流布したる跡あり。取締を主張する人々は、此の區別を明確にせずして、徒に自然主義を攻撃するものゝ如し」(無署名)などのように、自然主義者の弁解のようにも思われるような記述がある。加えて、この三月号では、天溪自身も文芸時評の欄の最後の「余白録」で「またはや発売禁止問題が持ち上がった検閲官諸氏も、敵命を出す位ならば、正々堂々と論陣を張つて貰ひたい。(中略)教育家や、倫理学者は、頻りに自然主義を攻撃するが、何時も空漠たる抽象論ばかりで張り合いがない。『都会』の発売禁止は実に好問題であるから、此の際之れに就いて、具体的に立論して貰ひたいものだ」と書いており、翌月からは自ら立論して社会からの攻撃を打ち返していく。無解決の論理を繰り返して説いていた外的要因はこのような社会状況にありたのである。

天溪にやや遅れて、同じく自然主義理論の指導者である島村抱月も、天溪に同調した意見を出している。談話筆記「文芸上の自然主義」(明治四十一年五月、「教育時論」)

がそれである。この文章で抱月ははじめて「芸術と実行」問題について「本能主義は実行の主義であるが、自然主義は文芸上の一傾向で、これは実行と直接の關係を有つてをらぬ」と表明している。そしていくつかの論を経て、抱月の「芸術と実行」論は、「芸術と実生活の界に横たはる一線」(明治四十一年九月、「早稲田文学」)に結実していくのである⁵⁰。

従来、ジャーナリストの性格が強いと非難されてきた天溪であったが、時事に目を配ったジャーナリストであったからこそ、ほかの自然主義者よりいち早くこの問題の重要性を理解して論を持ち上げることができたのだと考えられる。

しかし、外部の圧力に対するこのような弁明をもって「芸術と実行」論争の発端だと考えることはできないだろう。なぜなら、天溪の弁明と抱月の同調だけでは論争にならないからである。二人の主張の方向はほとんど等しい。この問題が論争へと発展するためには、もう一方の主張、すなわち「実行即芸術」の立場をとる人物がいなくてはならない。それこそが次章で論じる岩野泡鳴である。

右にも引用した今井氏の論は、明治四十一年四月二十六日に発表された岩野泡鳴の「文界私議 中島氏の「自然主義の理論的根拠」」について、「つぎに続く長谷川天溪・島村抱月の発言をそれに対する応酬と読むことは不可能であ」という理由で、「泡鳴のそれを「実行と芸術」論争の発端と呼ぶわけにはいかない」と説いている。しかし、本当にそうだろうか。タイトルが示すように、その文章は中島徳藏「自然主義の理論的根拠」（明治四十一年四月一日、「中央公論」）に対して弁駁したものであり、泡鳴自身の「新自然主義」の論理を述べたものでもある。加えて、天溪や抱月に対しても泡鳴は文末で次のように指摘している。

僕等の新自然主義は人生観であり、同時にまた芸術観でもあり、人生と芸術とに何等の区別を置かない程切実であるべき筈だが、花袋氏を初め、天溪氏も抱月氏もただ区別された芸術の範囲で之を考へてゐるらしい。

ここからは自然主義が文学上の主張だと述べた天溪や抱月とは異なった姿勢を見せる泡鳴の意欲が読み取れなくもない。むしろ、これだけでは論争の発端とは言いがたい。むしろ、この後の展開にこそ注目せねばならない。天溪の「芸術即自然主義」（四月二十四日・二十五日）が発表さ

れた次の週に、同じく「東京二六新聞」の「時代文芸」欄に、泡鳴は「利那主義と生慾」（五月一日・二日）を寄せた。泡鳴は天溪や抱月と同じように、無理想無解決を立脚地に行っているが、天溪や抱月の芸術は「人生の一部、または人生と区別した物」であり、それが「最近時代の真の要求するものであらうか？」と反問した。そして、彼の「新自然主義といふ利那主義には、区別された芸術はない。たゞこの人生観——無解決、無理想の主義——を以つて芸術に実行すれば、そこに自己が芸術として生きて居るのである」と言明している。つまり、泡鳴は明確に芸術を人生と同じレベルのものだと見ているのである。それに続いて、泡鳴は五月三日の「読売新聞」に「文界私議 早稲田文学の詩論」を発表するが、その最後に「雑言」を付している。その中で再び、天溪の「芸術即自然主義」と「自然主義と本能主義との別」での、文芸の材料には価値の優劣がないという主張を、「消極的態度」、「欧州の旧自然主義と同一の行き方に過ぎない」と非難している。

興味深いのは、この日の「読売新聞」の「日曜附録」には、抱月や天溪への批判を述べた泡鳴の上述の論文を載せただけでなく、天溪の「我観雑景」という論文をも掲載しているという点である。天溪はその中で、泡鳴が「文界私議 中島氏の「自然主義の理論的根拠」」で提出した「花

袋氏を初め、天溪氏も抱月氏もただ区別された芸術の範囲で之を考へてゐるらしい。」という疑問を引用して、やはり彼の無解決論を自分の答えとして持ち出している。さらに天溪は泡鳴の主張を解決の文学だとし、文末で泡鳴に「明白な説明を聞かむと欲す」と詳しい説明を要求した。最後に付された日付は四月二十八日ということからも、天溪は泡鳴の二十六日に発表した文章を読んでからすぐ批判の筆を取ったことが推測できる。

泡鳴はまた、五月十日の「読売新聞」に「霊肉合致の事実」を発表する。ここでは主に「自然主義の価値」（明治四十一年五月、「早稲田文学」）で抱月が提出した「芸術の為めの芸術」という説に批判を加えている。また、抱月批判だけにとどまらず、泡鳴は天溪の無解決の論理に対しても、それを消極的な態度だと非難している。

そして、五月十七日の「読売新聞」の日曜付録に、天溪は「霊肉合致の意義如何」を発表し、泡鳴の論に対して疑問を提示した。二十四日には泡鳴はその反論の形として「肉霊合致―自我独存（長谷川天溪氏に答ふ）」を発表する。三十一日、再び天溪は「自我の範囲（岩野泡鳴君に与ふ）」を発表して、翌々週の六月十四日には泡鳴が同じ欄で答弁した。このように短い期間にすぎないが、「読売新聞」の文芸欄で、天溪と泡鳴との間において、「芸術と実行」問

題をめぐる論争が行われたのである。

では、十七日以降の具体的な内容をも詳しく検討しよう。

天溪は「霊肉合致の意義如何」で、異論を立てる前に、在来の宗教や道徳を破壊するという点では、自身の論と泡鳴の論との間に差はないと言明する。次に、泡鳴の利己的自己存立の主張を「普遍的の自我ではなく、刻一刻の自我の現れたのが人生である」と解釈しているから、「君自身も無解決の態度を守るものではないか」と指摘している。

天溪はこの二点を確認して、自然主義理論で最も肝要なことは、「*what is*の現実を承認すると同時に、*what ought to be*の人生を説かぬ」ということになるから、「僕の説に対して敢て反対の態度を取る必要はあるまいと思ふ」と述べている。さらに泡鳴の思想に二つの疑問を示す。一つ日は泡鳴の主張では客体の存在が不可能だということであり、二つ日は、無解決の態度では実際の生存が困難だということである。

天溪のこの反論を日にして、泡鳴は天溪が人生から区別された芸術主張者であることをさらに確信した。そして、それに反対して、二十四日の「肉霊合致―自我独存（長谷川天溪氏に答ふ）」で、泡鳴は「芸術上の無解決は芸術家の無解決であり、芸術家の無理想は人生の無理想であらね

ばならない」と説いた。つまり、「實際問題に対して無解決態度がなければ、その人の芸術に対する無解決態度は密接な物ではない、拵らへた物」になるわけである。無解決は実際の生存の態度で、それが肉霊合致の状態でもある。さらに「芸術の本志は、帰すところ、自己描写」であるため、客体を描写するのはまた拵え物になる。完全に自己独存を信じる泡鳴にとつては、客観の追求は論外だということわけである。これによつて、泡鳴は天溪の質疑に反駁したと同時に、天溪の理論を「いつまでも説明を与へない『現実』とか、『ありのまゝ』とかを繰り返してゐても仕様がなではないか？」と揶揄した。

天溪は、五月三十一日の「自我の範圍（岩野泡鳴君に与ふ）」で、泡鳴が説いた「寧ろ芸術を去つて軍人となり、政治家となり、豊太閤やナポレオンの様な無解決の人生を無解決に生活した方がいゝ」という点に対して、「生活問題に接すれば、生きなければならぬと言ふ標準を立て、之れを以つて解決を下ろしつゝ生を継続してゐる」と説いている。實際の解決では満足できない人は、「消極的、受動的、静止的、傍觀的」な態度を取り、それは芸術家が芸術を作成する態度と同一であるというのである。さらにここで、自然主義を實際の人生に実行するならどうなるかという設問に対して、天溪は「無解決と解決」での「禪僧又は

老莊派」になるといふ答えからさらに一步進んで、實際の人生において無解決の態度で生きる場合は、芸術活動に従事するしかないという結論を改めて明示した。そして、泡鳴の自己独存の理論は「純主觀論を立てたもの」であるが、無解決を主張するなら、「非我の存在を否定し得」ないと非難し、その純主觀主義を拒絶した。文末に天溪は次のように述べる。

君の誤解するところとなつたのは、君が主觀客觀の交渉問題を顧みず、また人生の觀察者たると、實際に生活する場合、此両態度、即ち現実を無解決的に觀察すると、現実の一部として生命を維持せむとする態度と同一視したからであらうと思ふ。

六月十四日の同紙上の「文界私議」に、泡鳴は自らの立場を変えることなく、同じ主張を繰り返している。そして主觀客觀の問題に対して、客觀を想定するのは一種の偽善にすぎないと指摘し、次のように宣言している。

僕は飽くまでも自然主義を主觀的につつ込んで行くところに、わが国の、やがて世界の、新文芸となるべき物が出来るのだと信じてゐる。芸術家が天溪氏等の所謂『人生の觀察者』たる地位より進んで、僕の所謂『実行者』たるべき時代が到着したのである。

天溪は「自我の範圍（岩野泡鳴君に与ふ）」の最後で、

客観の存在について泡鳴を問い詰めたが、泡鳴は「非我なる客観」が実存物ではないと簡単にその攻撃をかわした。徳田秋江に二階で騒いでいると冷やかされる。この「芸術と実行」論争は、天溪が「さらば議論の必要もない」と言い、続きの反論の発表を控えたことで収束に向かうことになった。

四

前章までは、時間の流れに沿って「芸術と実行」という問題をめぐる天溪と泡鳴の発言、両者の応酬を見てきた。確かに天溪がこの問題を取り上げた最も重要な外因は、「都会」の発禁をはじめとする一連の社会的事件である。社会からの誤解が強くなったため、自然主義と本能満足主義との差異を弁明せざるを得ない天溪の発言は、自らの「芸術と実行」論になっただけでなく、泡鳴の反論をも引き起こした。芸術と実行との関係という争点から、天溪と泡鳴との論争が始まり、そして、二人の自然主義理論が決裂した。これは「芸術と実行」論争の過程を論じる際には無視できない事実である。

では、泡鳴はなぜ天溪の主張に対して異論を立てたのか。そのことについて考察を加えておきたい。泡鳴が新自然主

義を鼓吹するのは、『神秘的半獣主義』（明治二十九年六月、左久良書房、後『半獣主義』に改題）が刊行されて以来であり、それから四十一年九月までの間に新聞雑誌に発表した評論を集めた第二の評論集『新自然主義』（明治四十一年十月、日高有倫堂）の巻頭には、「かの『半獣主義』の続編と見てもいい。ただ前著から神秘的な口述は取り去つてしまひたいのであることだけを断つて置く」という記述がある。したがって泡鳴の自然主義論は、晦渋な半獣主義を敷衍したものだと考えられている。『芸術と実行』問題に直面する際にも、半獣主義以来の思想を以て立論していた。明治二十九年九月に「早稲田文学」に発表した「メレジコウスキのトルストイ論を読む」において、泡鳴はすでに「久遠の生命は苦痛で、最も個人的のものである。宗教又は哲学に組織する余地を許さない」から、「僕は『芸術の為めの芸術』主義を採用しない。半獣主義から出る自然主義は、一言で言へば、悲痛の霊を体現すればいいのだ」と述べている。早くも天溪や抱月の自然主義理論と違った方向が提示されているのである。

同じ自然主義評論家の肩書きを持った天溪と抱月との二人に対して、泡鳴は最初から違う態度を示していた。泡鳴は次の引用のように、その頃からしばしば抱月の理論を攻撃していた。

その新自然主義（稿者註―抱月の自然主義）は、坪内博士の昔の没理想論も同じことになつて、神や運命や自然を何となく外延的存在物でゞもあるかの様に見て居たクラシク思想が半ば勢力を振ふことになるだらう。（早稲田文学並に時事新報の記者に答ふ）明治四十年六月九日、「読売新聞」

極旧式の古典派の見解である。（中略）僕等は、抱月氏に従つて、自己を没却して再び之を大きくして捉へるといふ様な、都合のいゝ行き方が出来るものだとは思はない。（諸評家の自然主義を評す）明治四十年十月十三日、「読売新聞」

実は泡鳴は、天溪のことを「立派な評論家だ」（「諸評家の自然主義を評す」と評していることからわかるように、彼の評論に賛同の意を表すことも多かつた。だが、やはり天溪が自然主義を文芸上の主義に規定した時点から、泡鳴は批判の矛先を天溪に向け始めたことは、ここまでに論じてきた通りである。前述したように、「芸術と実行」問題に対して、泡鳴は世の中に現存する抽象的解決、即ち理想を拒否して、刹那刹那における個人の肉霊の感覚を唯一の信頼できるものと見てゐる。その感覚によつて、人生の全体が現われてくるのであり、かくして、人生が充実し、宗教も哲学も無用になると同時に、刹那主義を体現

する芸術が肉霊合致の人生の全部になると泡鳴は主張してゐる。「わが国に発展しようとする芸術上の自然主義――苟も新時代の要求を満たすに足るものとして――は寧ろ實際問題乃ち、人生観とは分離す可からざるもの、否、同一物でなければならぬ」（「刹那主義と生慾」と言つた泡鳴が、芸術を実行の行動から分離させた天溪を批判し始めたのは当然のことであろう。

「都会」発禁をきっかけに天溪はあえて自分の「芸術と実行」論を提示した。彼の論点を批判した泡鳴は、発禁問題に無関心であつたわけではない。彼も天溪とほぼ同じ立場に立つてこの問題を論じてゐる。「文界私議 新聞記者並に法律家に注意す」（明治四十一年七月十九日、「読売新聞」）で泡鳴は、法律家は自然主義の眞の内容を知らず「都会」の文学価値を判断する知識もなかつたことと、新聞記者はそれを糾弾する勇氣がなかつたことを強く批判した。一方、天溪もまた六月の「太陽」において、文芸審査院の設立の必要性を説き（「現実主義の諸相」）、さらに十一月にも同誌に再び文芸取締りの問題を取り上げて同じ主張を述べてゐる（「文芸の取締に就いて」）。それに続いて泡鳴は「文芸取締問題と自然主義」（明治四十一年十一月十五日、「読売新聞」）を発表し、天溪の意見に賛同を示している。ところが、これらの論文で天溪と泡鳴は、政府

に対し、基準を制定する部局の設立を要求しただけであった。

つまり、論争の内容となつたのは、文芸への政府の厳しい規制をめぐつた議論ではなかつたのである。争点はあくまでも自然主義の主張にある。この時期の天溪の発言に對して、稲垣達郎氏は「あきらかに、人生の眞実追求の態度なり、方法なりとて考えを進めてきながら、その途上で、それを文芸の世界だけに限定してゆくという、一種のすりかえの後退をしまつた^{二二三}」と述べている。しかし、前に述べてきたように、この議題に向かつて、天溪は自らの「無解決」の論理をもつて論陣を張つてきたのである。この論理は、前も少し触れたように天溪の「現実」に根ざしたもので、「都会」発禁問題に觸発されて急に提出したものでなかつた。

吾人は寧ろ無解決を悦ぶ。現実を露出だにすればそれに足れりとす。吾れ等の見る所を以つてするに、現實はコスモスにあらずして、ケオスなり。このケオスの裡に在りて解決を求めむとす、抑も小主觀の能はざる所なり。ただそれ吾人の觀たる現實を開展すれば、これ即ち新意義にして吾人の理智の慾より見れば、これを称して無解決といふべきなり。

これは天溪の「再び自然主義の立脚地に就て」（明治四

十年十二月、「太陽」からの引用である。「破理顕実」という天溪が打ち出したこの日本自然主義のスローガンは、従来の理想を破壊して、實在する現實を再現することを指している。その「顕実」の方法として、「無解決」は最も根本的な主張である。自然主義者としての彼が主張した「現實」は從來、太田正雄（木下李太郎）をはじめとする論者にしばしば厳しく非難されている^{二二四}。しかし、天溪が唱えた現實そのものは、一つの理念である。現實は、科学を含む従来の理想が「幻像」としてすべて破棄されてもなお残存しているものだ、天溪は考えている。さらに、現實は残存しているものであるだけでなく、唯一意味のあるものだと思はれている。そのことは、在來の価値判断をすべて放棄して、唯一信頼できる価値の根本となりうる現實そのものに回帰せよという天溪の主張の核心にあるのである^{二二五}。このようにして、事實を意味する現實を芸術にする過程において、現實を「有りの儘」の状態に維持するため、「無解決」は絶対に欠かせない条件なのである。それは眞實を描くための無飾芸術の要求であるとも言える。つまり、この無解決はあくまでも芸術作品を作る際の方法として唱えられるものであり、實際の人生のレベルで唱えられるものではない。「芸術と実行」問題に對する天溪の発言の中軸をなした「無解決」という論理は、明治四十年十

二月のこの「再び自然主義の立脚地に就て」まで遡行できようである。以上のように、天溪は、「芸術と実行」という問題に対して、自然主義者になってから一貫した主張で論陣を張っているのである。

一方、泡鳴も、「半獣主義」を基調とした新自然主義の思想をもって天溪に反論を起したのである。最初の評論集『神秘的半獣主義』において、人面馬体の動物、半獣主義の神体であるケンタウロスが象徴した二元主義を信仰する泡鳴は「この霊獣の主義は生命である、またその生命は直ちに実行である」と説いている。そこから泡鳴の「芸術即実行」という立場は明治三十九年頃すでに固定したという見方もあること。このように、「芸術と実行」論争において彼らは、それぞれの内面的な論理に基づいて、既に抱いていた自らの論を敷衍していたと考えられる。同じく自然主義の旗を振っていながらも、二人の主張には相違があった。そしてその違いが、「芸術と実行」問題によって顕在化したのである。天溪と泡鳴とのこのような応酬は、従来の「芸術と実行」研究では無視されてきたが、これまで論じてきたように、それは自然主義の実相を理解する上で重要な問題であったのである。

五

では、本稿の最後に「芸術と実行」問題をめぐって天溪と泡鳴との主張の違いを整理しておきたい。そして、この論争が二人の自然主義思想の中でどのような位置を占めるのかを考えたい。

天溪の自然主義主張には現実への強い意欲があった。芸術即人生と言い張った泡鳴に対して、天溪は、自身の主張が芸術を人生から離れさせようとするものではないという立場を表明している。この論争の中で天溪は、区別された芸術という泡鳴の批判をどうしても認めなかった。彼の無解決は、現実の再現を図る方法であるから、文芸を限りなく現実の人生に近づける努力がその根底にある。そして「俗に客観視される物、乃ち、非我と思はれる物の真偽、善悪、美醜等はそのまゝで自我を組織する部分的材料に過ぎないのだ」（「肉霊合致―自我独存（長谷川天溪氏に答ふ）」）と主張した泡鳴に対して、天溪は主観の重要性を認めながらも、客観の存在をも無解決の態度のもとで認めている。それは芸術の範囲を広げる意志からのものである。自身の自然主義の芸術観を全うし、それに基づいた実際の作品の誕生を俟って、「幻滅時代」の新しい方向が見えてくると天溪は信じていること。

それに反して、泡鳴は当初から個人の生き方を要求し、

その生活態度が芸術になる可能性を含んでいると考えている。確かに、吉田精一が泡鳴の「思想は自然主義評論家の中で最も天溪に近いやうであるが、しかしまた違ふ点もある」と指摘したように、従来の理想、道徳、ないしは文芸の流派をすべて拒絶するという出発点においては、二人は同じであるが、文芸上の無解決か実行上の無解決かというところで主張が分かれる。そして自然主義の理論としては、抱月の支持もあつて天溪の論が正統な位置を得ており、芸術と実行とは別な問題だという考え方が自然主義の主流的主張として定着していった。この「芸術と実行」問題を樗牛の「美的生活論」を継承した課題として理解した林原純生氏の言葉を借りると、自然主義評論家は「『芸術と実行』の問題を自己の課題として負い」、本能主義の「一元化への誘惑に抗しながら、芸術主体の修養的、精神的な確立という形で『実行』の牽引から脱出しようとした」ということである。一方、自然主義作家の中で独特な存在と目された泡鳴は、天溪が反論をやめてからも、依然として、肉霊合致と利那主義を武器として抱月を攻撃し続けている。

人生における一切の理想や解決を放棄し、旧物を破壊する性格をもつたこの文学運動では、現実をより切実に表現することが中心課題とされたため、実際の人生の思想や生

き方に関係してくるのは避けられない。したがって、自然主義はあくまでも文芸上の主義であるという説明から、この文芸思想を持った人はどのような思想で生きていくべきかという疑惑が生じたのは当然であると言えよう。芸術としての独立性を保つことをも包含する、「幻滅時代」をスローガンとした天溪の理念は、既存の社会的価値観を打ち壊すところから出発したが、やがて道徳そのものを逸脱するに至り、矛盾が露呈したことも否定しがたい。泡鳴との応酬をやめた原因を考えてみると、泡鳴の強烈な主観は動かさないと気づいたこともあるだろうが、その他に、天溪は自身の自然主義理論の限界を意識したという可能性も考えられるのではないか。この応酬をやめた年の七月に、天溪の自然主義期の評論を収録した『自然主義』（明治四十四年七月、博文館）が単行本として出版された。泡鳴に自然主義の内容ならこの著作を見よと賞賛されたこの本の「はしがき」に、天溪は次のように書いている。

幻想の裏に暮らす人は幸だ。自身すら実行できぬ様の理想的言論を述ぶる人には勇氣がある。宗教や、学芸を切賣しながら而も社会を教化すと言ふ人は一種の商業家だ。僕にはその詩的想像も無い、勇氣も無い、商略も無い。唯此の脳味噌に湧いた儘を書いて見たらば、こんな妙な物に成つたのだ。

「幻象の裏に暮らす人」や「実行できぬ様の理想的言論を述ぶる人」という批判が泡鳴に向けられたものかどうかは無論確定できないが、自嘲の意を含め、現実には執着する意志はつきりと見られる。この時点で、天溪が「自然主義」という表題で単行本を出していることを、彼の自然主義理論が完成している証だと読み取れなくもない。一方、泡鳴も同じ年の十月に『新自然主義』を出版した。収録された論の中で、最後の附言として収められたのは抱月の「観照」に関する論への批判であり、内容はやはり彼の実感的芸術観を主張するものである。それだけではなく、附言の前の最後の一篇は「表象と暗示」であり、それに「新自然主義の結論」という副題をつけている。収録された諸論の内容を見ると、天溪との応酬を通して、そして抱月への批判を通して、泡鳴の新自然主義が確立され、ひとつの結論に達している印象が強い。以上のように、この「芸術と実行」論争の発端の文学史の意味を考えてみると、この二人の自然主義論は明治四十一年のこの論争と共に完成しているということが言えるのではないか。

終わりに

「芸術と実行」問題をめぐる議論は、天溪と泡鳴との応

酬や泡鳴と抱月との応酬のレベルで終わったわけではない。明治四十二年一月に、花袋は自身の主宰する「文章世界」上のコラム「評論の評論」で、「自分は実行上の自然主義といふものは意味を成さぬと思ふ。自然主義の傍観的態度は既に始めから芸術的学問である。また自然主義はさうした処にそのまことの意義を有して居るのである。」と述べ、この問題について発言を加えた。そして七月まで毎月この問題を同欄で論じている。そして花袋の発言に引き続いて、文壇において意見を述べる論者が多くなった。金子筑水「実生活と文芸」（明治四十二年二月、「中央公論」）、「文芸と実人生」（明治四十二年五月、「中央公論」）、「芸術と実人生の接点」（明治四十二年六月、「新潮」）や「芸術観の一面」（明治四十二年六月、「文章世界」）、徳田秋江（近松秋江）「芸術は人生の理想化なり」（明治四十二年六月、「現代」）、石橋湛山「観照と実行」（明治四十二年六月十日〜二十一日、「東京日日新聞」）、相馬御風「自然主義論最後の試練」（明治四十二年七月、「新潮」）、松原至文「傍観と実行」（明治四十二年七月、「新潮」）、樋口龍峽「芸術の世界と実世界」（明治四十二年九月、「新小説」）などがそうである。抱月も「行はせる芸術と考へさせる芸術」（明治四十二年一月、「秀才文壇」）、「実行的人生と芸術的人生」（明治四十二年二月、「新潮」）などの、

ほぼ同じ趣旨を敷衍したものを発表し、天溪も「芸術と実行」(明治四十二年八月、「太陽」)を発表している。これらの文章の発表時期、数の多さから見れば、確かに明治四十二年六月に「芸術と実行」問題は文壇の関心の焦点の一つとして「ひとつの絶頂に達した」(平野謙)と言つても間違ひはないが、しかし前述したように、自然主義者の立場は天溪と泡鳴との応酬の時点ではすでに決着していたのである。明治四十二年になると、この「自然主義論最後の試練」と称される問題は、再び文壇の人々に持ち上げられ、広がりを持った議論となり、問題の性格も変わっていく。しかし、この問題については稿を改めたい。本稿では、「芸術と実行」論争の発端について、明治四十一年五月前後の天溪と泡鳴との論争を検討することにより、その時期や内容を明らかにした。

〈注〉

長谷川天溪と岩野泡鳴との評論の引用はすべて初出による。但し新字に改めた。

- (一) 戦前に「芸術と実行」に触れた研究としては、たとえば唐木順三『現代日本文学序説』(昭和七年十月、春陽堂)や小林秀雄「私小説論」(昭和十年五月、「経済往来」)が挙げられるが、どちらも「芸術と実行」という問題を中心として

取り上げた論ではない。たとえば、小林秀雄が「私小説論」で提出した視点は、のちに平野謙の説に大きく影響したと考えられようが、「芸術と実行」を主体的に取り上げた研究とまででは言えない。そこで本稿は窪川鶴次郎「実行と芸術」の問題―日本自然主義文学の提起したもの(昭和二十五年四月、「文学」)と平野謙「実行と芸術」(昭和二十八年九月、「近代文学」)が嚆矢であると考えたい。とりわけ平野謙の論は、近代文学史の構図を提出し、後の研究に大きな影響を与えたと考えられる。

(二) 今井泰子氏は「実行と芸術」(『近代文学3 文学的近代の成立』昭和五十二年六月、有斐閣)で、この問題の研究史を回顧し、当問題の発端について、研究者が出した諸説を、次のように三つに分けている。

- 一、明治四十二年一、二月、田山花袋「評論の評論」
- 二、明治四十一年九月、抱月「芸術と実生活の界に横たはる一線」
- 三、明治四十一年四、六月の間

そして、今井氏はまた第三の「明治四十一年四、六月の間」という項目を、次のように四つに分けている。

- 1 明治四十一年五月、抱月「自然主義の価値」
- 2 明治四十一年五月、抱月「文芸上の自然主義」
- 3 明治四十一年五月、天溪「無解決と解決」

4 明治四十一年四月二十六日、岩野泡鳴「文界私議 中
島氏の「自然主義の理論的根柢」

(三) 川副国基「解説」(『日本近代文学大系 第五十七巻 近代
評論集』昭和四十七年九月、角川書店)

(四) 日比氏の論文以外に、田口道昭「啄木と近松秋江―「実行
と芸術」批判の位相―」(平成十六年十二月、「神戸山手女
子短期大学紀要」)があるが、田口氏は相馬庸郎氏の研究を
踏まえて花袋の「評論の評論」(明治四十二年一月)を論争
のきっかけとしている。

(五) 『石川啄木全集 第四巻 評論・感想』昭和五十五年三月、
筑摩書房

(六) 「太陽」臨時増刊(明治四十一年二月)の「附纂 明治四
十年史」の中に「自然派の作物は、所謂モデル問題なるも
のを呼び起こせり。これ藤村氏の『並木』が動因になり、
尋で花袋子の『蒲団』出でたるが故なり。」という記述があ
る。

(七) 『鳩外全集 第五巻』昭和四十七年三月、岩波書店

(八) 『辻潤全集 第一巻』昭和五十七年四月、五月書房

(九) 実際に、「芸術と実生活の界に横たはる一線」において抱月
が提示した(「観照」と「芸術と実行」という言葉の論理は、
「自然主義の価値」(明治四十一年五月、「早稲田文学」)、「文
芸上の自然主義」(談話筆記)、「駁論二三」(明治四十一年

六月二十一日、「読売新聞」)、「冷めた自己」(明治四十一年
八月二十八日・二十九日、「東京二六新聞」)で、すでに
出されている。特に、談話筆記「文芸上の自然主義」と「駁
論二三」は、「観照」という概念の骨格を明白に規定してい
る点で、注目に値する。また、「駁論二三」に「芸術と実生
活の境に割する一線」という言葉を提示したことから、こ
の時期からすでに「芸術と実生活の界に横たはる一線」と
いう論文を構想していることがわかる。したがって、「芸術
と実行」問題の発端として「芸術と実生活の界に横たはる
一線」に注目した従来の部分的な研究、たとえば数禎子が、
この評論が「最も根本的にこの問題を提起したものであ
つたと述べた点、あるいは白井吉見が「抱月は、いち早く
『芸術と実生活の界に横たはる一線』を書き、「実行との間
に一線を割」した人だと述べた点は、修正される必要があ
るだろう。

(二〇) 「文界私議」というのは泡鳴が「読売新聞」に評論を
発表する時に多用した表題で、この六月十四日のものには
単行本『新自然主義』に収録された際には「文界私議(九)』
になっている。

(二一) 当時の「読売新聞」の「日曜付録」の欄においては、徳
田秋江のコラム「文壇無駄話」はいつも天溪と泡鳴の文章
の下の位置に掲載されていた。天溪は「自我の範囲」(岩野

泡鳴君に与ふ」で彼と泡鳴との論争について「本誌も迷惑であらうし、徳田秋江君から、また二階で騒いでみると冷やかされるから、簡単に切り上げやう。」と述べている。

- (二二) 大久保典夫「新自然主義(泡鳴)の意義」(昭和四十三年九月、「国文学 解釈と鑑賞」)は、「新自然主義」というのが彼のいわゆる「半獣主義」にほかならぬ」と述べている。また、鎌倉芳信「泡鳴『神秘的半獣主義』の性格―自然主義とショーペンハウアー・ニーチエ―」(平成九年四月、「日本文学」)は、「神秘的半獣主義」の自然主義的性格は、やがて花袋、藤村などとの思想的差異を明確にし、「新自然主義」を唱道する素地となる」と指摘している。

- (二三) 「長谷川天溪」(昭和二十七年十月、「国文学」)

(二四) 太田正雄「太陽記者長谷川天溪氏に問ふ」(明治四十年十一月、「明星」)。また、成瀬正勝「後期自然主義文学理論の展開―その第一期について―続」は天溪の「真正なる幻像」を求めようとする「論旨には粗笨の嫌ひがあり、天溪の技巧排斥論は、「美的鑑賞の貧困を表白したに外ならぬ」と指摘している(昭和十五年一月、「文学」)。白井吉見は「破理顕実とか、無念無想とか、現実直視とかいう二、三の標語がかかげられているにすぎ」ず、「理想とは何か、現実とは何か、理想と現実との関係は何か、それらと文学との関係はどうななければならないか、そんな基本

的なことすら何ひとつ明らかにされていない」と、天溪を強く批判している(『近代文学論争 上』昭和五十年十月、筑摩書房)。

- (二五) 長谷川天溪「幻滅時代の芸術」(明治三十九年十月、「太陽」)を参照。

(二六) 吉田精一『自然主義の研究 下巻』(昭和三十三年一月、東京堂)は、泡鳴『神秘的半獣主義』での主張を「文芸即人生、芸術即実行」を強調する。刹那の十全の充足によって生命の燃焼をはかるのが第一義的生命であり、芸術も亦この活動にほかならない」と説明し、芸術即実行という主張はここですでに提出されているという見方を示している。

(二七) 高田瑞穂「幻滅時代」前後―天溪の現実主義とその命脈」(昭和三十九年十一月、「日本近代文学」)は「真に「現実へ」立ち還えりさえしたら、その「現実から」何かが生れる筈であった。そして、そういう天溪の現実主義、主義と言うよりは「現実へ」の全体を、その奥で支えたものが、あの「幻滅時代」なる想念だったのである。」と天溪の「現実」観を解釈している。

- (二八) 注一六参照。

(二九) 「美的生活論、自然主義、私小説―ひとつの史の見取図の試み」(昭和五十三年六月、「日本文学」)

(三〇) 「島村抱月氏に答ふ」(明治四十一年九月二十七日、「読

売新聞) が抱月「芸術と実生活の界に横たはる一線」に対する反論であり、「実行文芸、外数件」(明治四十二年三月二十一日、「読売新聞) が抱月「実行的人生と芸術的人生」(明治四十二年三月、「新潮) に対する批判である。

(二二) 「文芸取締問題と自然主義」(明治四十一年十一月十五日、「読売新聞)

(おう おくうん・本学文学研究科博士後期課程)

◎明治四十一年「芸術と実行」評論一覧表

明治四十一年	
四月	十五日 天溪「自然主義と本能満足主義の別」(文章世界)
	二十四・二十五日 天溪「芸術即自然主義」(東京二六新聞)
	二十六日 泡鳴「文界私議 中島氏の「自然主義の理論的根拠」」(読売新聞)
五月	一日 天溪「無解決と解決」(太陽) 抱月「自然主義の価値」(早稲田文学)
	一・二日 泡鳴「刹那主義と生慾」(東京二六新聞)
	三日 天溪「我観雑景」(読売新聞)
	五日 泡鳴「文界私議 早稲田文学の詩論」(読売新聞)
	五日 抱月「文芸上の自然主義」(教育時論)
	十日 泡鳴「靈肉合致の事実」(読売新聞)
	十七日 天溪「靈肉合致の意義如何」(読売新聞)
	二十四日 泡鳴「肉靈合致―自我独存(長谷川天溪氏に答ふ)」(読売新聞)
	三十一日 天溪「自我の範圍(岩野泡鳴君に与ふ)」(読売新聞)
六月	十四日 泡鳴「文界私議」(読売新聞)
	二十一日 抱月「駁論二三」(読売新聞)
八月	二十八・二十九日 抱月「冷めた自己」(東京二六新聞)
九月	一日 抱月「芸術と実生活に横たはる一線」(早稲田文学)
	二十七日 泡鳴「島村抱月氏に答ふ」(読売新聞)